

余山貝塚出土の加曾利 B2 式鉢形土器

吉岡 卓真

はじめに

本資料は、山内清男が加曾利 B2 式として位置づけた数少ない資料の一つである [山内 1964]。しかしながら、これまでに写真やスケッチを含め、山内の提示以前はもとより提示以降も取り上げられることが少なく、今日にいたるという状況にある [杉山 1928、国学院 1986、千葉県 2004]。そのため観察所見など基礎的情報も乏しい。

そもそも本資料が広く周知されることとなった初出典においても、山内による資料そのものへの解説はなく、別の個体を説明するための参考図版として提示されたに過ぎない。しかしながら本資料の器形や文様構成は、加曾利 B2 式の枠組みやその多様性を検討する上で特に重要な型式学的情報を保有しており、山内による加曾利 B2 式を理解する上ではなくてはならない資料であると認識する。

本論では当該資料の実測図をとおして観察所見を提示するとともに、今日的視点から加曾利 B2 式を型式学的に研究していく上での課題を整理する。

1. 加曾利 B2 式研究の中の本資料の位置づけ

本資料を学史的に位置づけるためには、加曾利 B2 式の型式設定当初の様相と、本資料がどのような脈絡のもとで掲載されたかを理解することが重要である。

1939 年に刊行された『日本先史土器図譜』(以下、『図譜』とする) 第 IV 集「加曾利 B 式(中位の古さ)」は周知のように斜線文を中心とした土器群が主体を占めており、先行型式である横帯文を主とする加曾利 B1 式との連続性を著しく欠く構成となる。

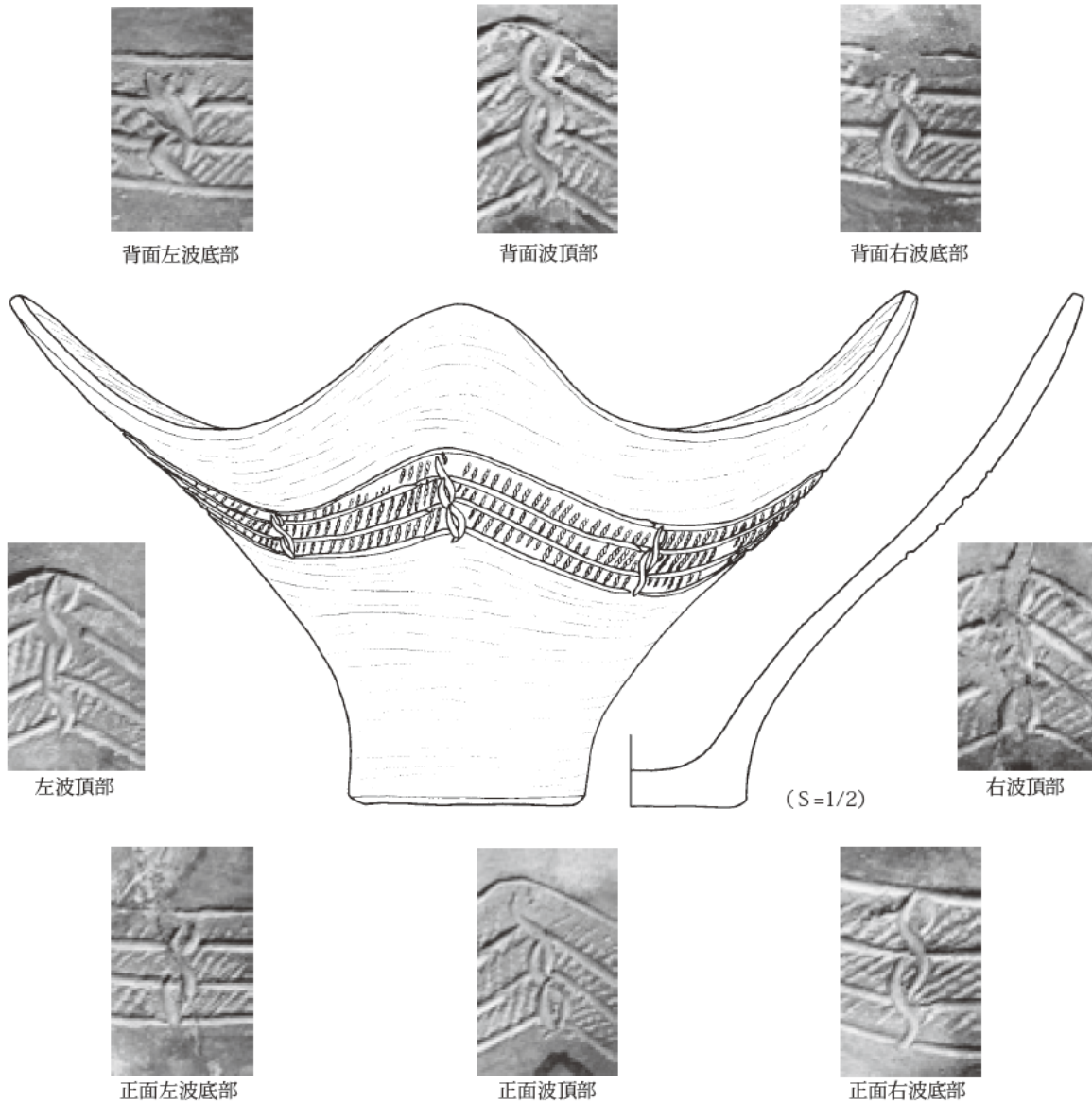
その後、山内は『図譜』における加曾利 B2 式の構成を補強する形で『世界陶磁全集』(以下、『全集』とする) と『日本原始美術』(以下、『原美』とする) を刊行し、本資料は『原美』に掲載された 4 個体の加曾利 B2 式のうちの 1 個体として登場する [山内 1958・1964]。

2. 資料の特徴

本資料は 4 単位を有する波状口縁の鉢であり、上面からみると正方形を呈する(第 1 図)。本図は『原美』掲載時の裏側を中心に実測を行った。幅広の口縁部は無文で内外面入念な横ミガキが施される。口縁部の断面は方形を呈し、内面に肥厚や沈線等の装飾は伴わない。胴部は 3 条の横帯文を描いた後、波頂部および波底部にそれぞれ区切り文を配置する。

区切り文はいずれも「ノ」字と「S」の字の組み合わせによるが、どの箇所も上段から下段に向かって描かれる。最上段に描かれる区切り文は、右側に「ノ」の字を描いた後、次にその左側に中段まで伸びる「S」字状の区切り文を描くという共通した施文順序を確認できる。

なお、本資料の区切り文に関する特徴として、横帯文を描いた後に区切り文を描き、なおかつ区切り文が横帯文の幅と対応することを意識して描かれている点が注目される。加曾利 B1 式の古相を示す鉢形土器の横帯文は、蛇行文や長円形文といった単位文様を組み合わせることで描かれているのに



第1図 加曾利B2式鉢形土器

対して、新しくなると横帯文と区切り文を別々に描き、なおかつ横帯文の幅に対応するように区切り文を描くという施文手法の変化が見られる [吉岡 2013]。

そこで改めて本資料における横帯文の描き方に着目するならば、その描き方は横帯文を描いた後に、横帯文の幅に対応させて区切り文を描いており、加曾利 B1 式期新段階における施文原則を踏襲したものと理解できる。

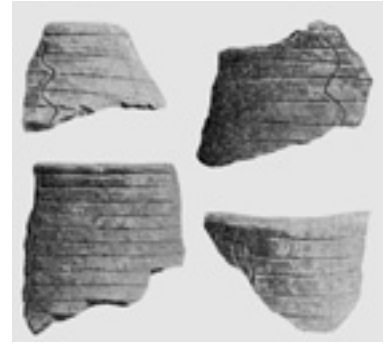
3. 資料の年代的位置づけ

『図譜』掲載の加曾利 B 式（中位の古さ）に掲載された遠部台遺跡の標識資料は、1932 年に大山史前学研究所によって調査された資料であり、20㎡程の非常に狭い範囲から出土した極めて一括性の高い資料である [池上 1937]。その発掘報告である池上の報文中には、標識資料の中心となる斜線文以外にも、「遠部第三類」と呼ばれる口頸部に横帯文を描く壺形の器種が含まれており、『図譜』

に掲載された蛇行する区切り文を伴う個体の他に、本資料と似た区切り文を伴う資料も見られる (第 2 図)。

興味深いことにこれらの区切り文は横帯文に対応せず、大柄でより雑な描き方のものでまとまる。

こうした描き方に関して、近年、遠部台遺跡の所在する印旛沼周辺遺跡群の調査では、大柄な雑描きの区切り文の他に、横帯文と対応した丁寧な描き方のものも見られる。両者の描き方が同一地域内に存在するということや、そもそも加曾利 B1 式では、横帯文



第 2 図 遠部第三類土器

に対応した区切り文が描かれていたことを考慮するならば、本資料と大山史前学研究所発掘の遠部台例に見られる横帯文への区切り文の描き方の差異は、地域差というより、むしろ年代差を示している可能性が高い。

そうであるならば、横帯文に対応するように丁寧に描く区切り文を持ち、山内が加曾利 B2 式として提示した本資料は、今日的な視点から見れば、『図譜』掲載の加曾利 B2 式の斜線文土器よりも古く位置づけられることになるだろう。

4. まとめと課題

加曾利 B2 式として山内によって位置づけられた本資料について、先行型式である加曾利 B1 式の鉢形土器との系統性を考えた場合、文様構成はともかく器形に関しては、口縁における無文部の幅や、突起の有無、口縁部と胴部を分ける区画帯の有無など多くの点で、加曾利 B 式 (古い部分) 掲載の鉢形土器との間に大きな差異がみられる。ただし、胴部に描かれる横帯文構成など、加曾利 B1 式の文様要素と共通する属性がみられるのも事実である。

なお『図譜』掲載の加曾利 B1 式の鉢形土器に後続するであろう器形と横帯文構成を伴う資料は、関東東部の各遺跡で確認できる状況にある。その点で本資料の成立に関して、どのように成立したのか、余山貝塚周辺の古鬼怒湾一帯に限定されるような、従来の広域的な研究では描き出せないより狭い範囲の中で成立する器種なのか、未だその成立過程を明示した研究は見られない。それを明らかにするためには、加曾利 B1 式に本資料の遡源となる一群が存在するか否かという、余山貝塚周辺を中心とした『図譜』掲載資料以外の器種に着目した加曾利 B1 式の型式構成の検討が必要となるだろう。

さらに今回提示した余山例は検討の結果、少なくとも『図譜』に掲載された斜線文を伴う資料より、型式学的に古い特徴を持つことを指摘した。その場合、本例に併存する斜線文資料の存在の有無など当該期土器群の全容把握と構造理解が不可欠であることは言うまでもない。

【参考文献】

- 池上 啓介 1937「千葉県印旛郡白井町遠部石器時代遺跡の遺物」『史前学雑誌』第 9 巻第 3 号
 国学院大学考古学資料館 1986『余山貝塚資料図譜』
 杉山 寿栄男 1928『日本原始工芸』工芸美術研究会 (北海道出版企画センターにより 1976 年に再刊)
 千葉県 2004「縄文土器収集資料」『千葉県の歴史 資料編 考古 4 (遺跡・遺構・遺物)』
 山内 清男 1937「加曾利 B 式 (中位の古さ)」『日本先史土器図譜』第 IV 輯 (1967 年再版合冊)
 山内 清男 1958『世界陶磁全集』第 1 巻 河出書房新社
 山内 清男 1964『日本原始美術』講談社
 吉岡 卓真 2013「加曾利 B1 式土器の細別と文様構成の成り立ち」『駿台史学』第 148 号